

中央大学学員会 中大技術士会支部

ニュースレターvol.38

会員の皆様へ

今年の桜の開花は全国的に早くなりました。桜と言えば花見ですが、最近は花見を目当てにした海外からの観光客が増えているのだそうです。全国のまちおこしでも花見をキーワードに、海外からの誘客に積極的に取り組んでいるところが増えています。生活習慣の違いからくるマナーの悪さや民泊の問題など、解決すべき課題は多くありますが、少子高齢化が顕在化する地方にとって、様々な分野で波及効果の高い観光事業は重要な施策だからです。「枯れ木に花が咲く」といえがびったりな桜の花は、世界が認める日本の代表的な観光資源の一つとなっています。

本会では会員の皆様からの投稿をお待ちしております。中大技術士のホームページ(<http://www.chuo-u-pej.org/>)から投稿用のフォームをダウンロードしていただき、投稿してください。

内 容	ページ
巻頭言	2 ページ
■ 「後樂園キャンパス 古今東西」：中大技術士会 副会長 小林 進	2 ページ
活動報告	3 ページ
■ 幹事会報告	3 ページ
■ CO2環境対策技術研究会活動報告	4 ページ
■ 大学支援部会活動報告	4 ページ
■ 広報部会活動報告	4 ページ
活動計画	5 ページ
■ 企画部会活動計画	5 ページ
■ 大学支援部会活動計画	5 ページ
■ CO2環境対策技術研究会活動計画	5 ページ
リレーエッセイ	5 ページ
■ 「あなたの趣味ってなんですか？」： 国島 旭さん（機械部門・総合技術監理部門）	5 ページ
エッセイ	7 ページ
■ 「里山通信」：木内 希沙彦さん（森林部門）	7 ページ
技術士第一次試験合格者から	12 ページ
■ 「技術士第一次試験合格体験記」：片桐 拓重さん（理工学部人間総合理工学科）	12 ページ

■ 「後樂園キャンパス 古今東西」:

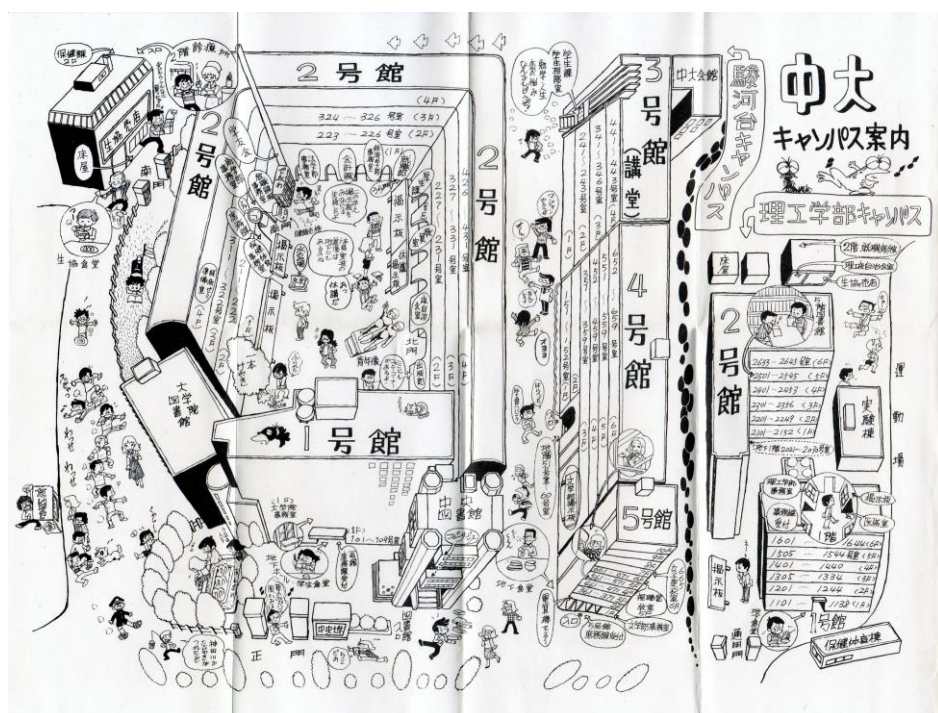
中大技術士会 副会長 小林 進 (情報工学・総合技術監理部門)

母校で教育技術員として学生実験を手伝うようになり、今年で3年目を迎えます。現在、私が学生のとき飛び回っていた1号館のみが残っています。その1号館で学生に実験の指導をしていると思うと、何か不思議な気がします。また、実験室には私が学生のときに研究で使用していた機器が保管されており、目にする度に懐かしさと感謝の気持ちが湧きます。更に、電気工学科を卒業された方は記憶の片隅にあるかと思いますが、実験が始まるときに撮られた写真も残っています。自分の写真を見ると懐かしいような恥ずかしいような気持ちになります。整理されていることから、当時実験を担当されていた先生方の学生に対する熱い思いを改めて感じます。



このような気持ちでここ数年過ごしていると、昨年理工学部長に就任された榎山先生が、「ホームカミングデーを後樂園キャンパスで行いたい」と言われました。理工学部の卒業生から「多摩キャンパスに行っても母校に帰って来たという気持ちにはならない」という声があり、理工白門祭に合わせて行いたいと考えているようです。時期は、11月3日と聞いています。中大技術士会は、毎年ホームカミングデーと理工白門祭に出展していることから出展の呼びかけがあれば（無くても？）出展することになると思います。そのときは、多くの会員の方に、後樂園に来て頂きたいと思っています。現在、唯一残っている1号館の寿命も長くないとの声が聞こえています。1号館がある今、ホームカミングデーを後樂園で行いたいと榎山理工学部長は言われています。

また、不思議なことに、この巻頭言を書いているとき机の引出の奥の方から多摩に移転する前の「中大キャンパス案内」が出てきました。この地図を見て懐かしく思われる方は多いのではと思います。中大技術士会の総会、講演会は基本的に後樂園キャンパスで行っています。是非、時間を作って母校に足を運んで頂けたらと思います。



■ 幹事会報告

行事名	開催日程	活動概要
平成 29 年度 第 6 回幹事会	12 月 15 日（金） 18：30～20：00	(1) 各部会報告 ・総務部会 ① 技術士第一次試験の合格発表があり、中央大学は在学生＋卒業生の合計で 241 名となり、全大学の第 3 位、在学生は 151 名で全大学の第 2 位で、4 年連続の第 1 位を逃した。第 1 位は 175 名の日大であった。 ② 11 月 24 日実施した石川先生の講演会は、24 名の参加があり収支は黒字であった。 ③ 11 月 18 日、大技連の総会があり、24 大学 56 名の参加があった。 ・企画部会 ① 次回講演会の講師として、都市環境学科の先生を中心に人選をすすめていく。 ② 法曹会との交流会は 3 月初旬に開催するよう進めている。 ③ テクノロジー懇談会は、國島幹事を中心に計画している。 ・広報部会 ① サーバー更新手続きを完了した。 ② CO2 環境対策技術研究会の第 30 回研究会報告を掲載した。 ③ ニュースレター vol37 を 1 月中旬発行予定である。 ・大学支援部会 ① 理工白門祭の父母会で「技術士第一次試験合格者」が 3 年連続第 1 位になったことが話題となった。 ・CO2 環境対策技術研究会 ① 第 30 回研究会が 11 月 24 日行われ、講演会 18 名、交流会 16 名の参加があった。 各学科との協力事項 (1) 筏プロジェクト 工業所有権に異議申し立てがあり、関係者間の協議を行っていく。 (2) 渋谷川復活プロジェクト 2020 年オリンピック終了まで休眠となる予定。 (3) ミミズロボット 今後スピードアップを図り、現場実証試験を行っていく。 次回幹事会 2 月 19 日(月) 学員会会議室で開催予定。

■ CO2環境対策技術研究会活動報告

行事名	開催日程	活動概要
H29 第 3 回幹事会 出席者 6 名	H30 年 1 月 18 日 (木) 18:30~19:30 後楽園校舎 5310 号室	第 30 回研究会(H29.11.24.)の報告 第 31 回研究会の企画 CO ₂ 吸収材、CO ₂ 固化の研究について
H29 第 4 回幹事会 出席者 6 名	H30 年 3 月 15 日 (木) 18:30~19:30 後楽園校舎 5310 号室	第 31 回研究会(H30.4.20.)の応募状況 第 32 回研究会の企画 CO ₂ 吸収材、CO ₂ 固化の研究について

■ 大学支援部会活動報告

項 目	内 容
「科学技術と倫理」講師 (ゲストスピーカ) 派遣	・ H30.5.29 岩瀬講師 H30.6.5 山下講師を派遣します。
「低緯度太平洋ソーラ ーセル帆走筏発電シス テムの成立性」	・ H30.1.25 於：2301 室 鈴木国際特許事務所と拒絶査定の打ち合わせを行いました。

■ 広報部会活動報告

項 目	内 容
サーバー運営	① メーリングリストおよび Web 名簿のメンテナンス実施 ② ニュースレターのメニュー表示の不具合を対応
ニュースレターの発行	① ニュースレター vol.38 作成、発行
HP 新規掲載	① ニュースレター vol.37 の掲載 ② CO ₂ 環境対策技術研究会第 31 回研究会案内掲載
その他	① 新規入会者 1 名をメーリングリストに登録 (技術士補 1 名)
会員の皆様へのお願い	① 就職、転勤、転職、転居等により連絡先が変更になった場合、幹事会宛てにご一報をお願いします。詳細はホームページ「入会のご案内」をご参照ください。連絡先：toiawase@chuo-u-pej.org ② ニュースレターへの会員の皆様らの投稿をお待ちしています。近況報告、受験体験談、2020 年東京五輪への期待、何でも構いませんので、積極的な応募をお待ちします。 ③ 会員相互の交流を深めることを目的に比較的気楽に投稿できる「趣味」を共通テーマとしたリレーエッセイを募集しております。執筆依頼がありましたら、躊躇せずに投稿をお願いします。リレーエッセイの執筆をご希望の方は toiawase@chuo-u-pej.org まで、お知らせください。意外な繋がりが生まれるかも知れません。

活動計画

■ 企画部会活動計画

行事	日程	内容
法曹会との交歓会	H30 年 5 月 10 日（木）	今回は法曹会の企画で開催 講師：弁護士・弁理士 矢部耕三 氏

■ 大学支援部会活動計画

行事	日程	内容
1 年生へのオリエンテーションを実施する	H30 年 6 月 18 日（月） 9：00～10：30 H30 年 6 月 19 日（火） 9：00～10：30	技術士の概要・試験制度・在学中に第一次試験合格のメリットを説明する。

■ CO2環境対策技術研究会活動計画

行事名	開催日程	活動概要
第 31 回研究会	H30 年 4 月 20 日（金） 13:15JR 高崎駅東口集合	見学先：大塚製薬高崎工場 交流会：赤城クラブ
H29 第 5 回幹事会	H30 年 5 月 17 日（木） 18:30～20:00 中大後樂園校舎 5310 号室	第 31 回研究会(H30.4.20.)の報告 第 32 回研究会の企画 CO ₂ 吸収材の研究成果について (大石副会長)

リレーエッセイ

■ 「あなたの趣味って何ですか？」: 國島 旭さん(機械部門/総合技術監理部門)

リレーエッセイと言う事で、「趣味らしき事を書けば何とかかな？」と軽い気持ちで引き受けたが、他人から見れば「何故、そんな物・行為に惹かれるの？」と理屈っぽい理系地頭の硬い私には、中々、趣味が思い浮かびません。

まだ、試みていないが、きっと妻と趣味の話をすると、「趣味に理屈は要らないの！」と、不思議な顔で情緒性の乏しい私を、宇宙人を見るが如く言うのだろう。「何故、何故-」とシツコク聞くと、「あなたと話をすると疲れる！！」と口喧嘩になること必至だ。他人から見れば、そんな行為を、きっと趣味と呼ぶのかも知れません。

昔、「私の趣味は妻の御機嫌を取る事」と妻に言ったら、「絶対に人前で言わないでね」とキツイお叱りを受けました。実益を兼ねた有意義な趣味と思えたのですが-。

他人から見れば不思議＆無駄で理解不能でも、公序良俗に反しなければ大抵が許されてしまう自己満足的な行為を「趣味」と呼ぶのでしょうか。



こんな私ですが、今までに何か趣味があったかな？と思い返すと、小学生時代に「切手集め」が流行ったので挑戦してみたが、三日坊主にもならなかった。切手集めの先に何が見えるのか全く分からなかった。そして、私の心の隅には、「趣味と収集癖、そして、拘り（こだわり）の謎」を秘めたまま、現在に至っております。

プロローグは、ここまでにして、私の趣味と言うべき「こだわりの収集物」を紹介します。これは米国のゼロハリバートン社のアルミ製バックです（現在は日本メーカーが販売権を所有）。

米国のアポロが月面着陸して月の石を入れて帰還した際のアルミ製バックであり、中身は壊れても丈夫なアルミ製バックは壊れないで有名になりました。逆に、バックは壊れても中身が壊れない方が実用的で良いのかも知れません。



布製バックよりは、無機質で型崩れしないアルミ製バックに、何となく心惹かれました。私は煙草を吸わないし、カメラにも興味が無かったが、灰皿、煙草ケース、カメラバック、ビジネスバッグ、そして、スーツケースなどまで、ロシア民芸品のマトリョーシカの如く、バックの中からバックが次々と出て来る様に大小、色々と揃えました。

妻からは、冗談で「そんなにバック集めて何処に行くつもり？ 私と一緒に居たくないから、旅行願望、現実逃避の深層心理が表れたのかな？」と言われドキッとさせられた記憶があります。

他人から見れば、多少、無駄な出費にも思えますが（小遣いの範囲内ですが--）、妻からは意外にも、「あなたにも、人並みに人間臭い所があるのね、そう言う所、嫌いでは無いけどネ」と好意的に受け止められました。

アルミ製で硬く重いので、電車内などでは人に当たらない様に注意しなければならないし、また、金網や硬い物に当たると傷も付きやすく、何かと取扱注意の厄介な代物である。しかし、最近は、私も年を経たのか、この面倒臭さと手間が掛かるのも悪くないナと思う様になりました。

やはり、取扱注意で面倒で傷付きやすく何かと厄介だが大事なモノの代表格は、妻になると思います。

そろそろ、お後が宜しい様で、「私の趣味は妻の御機嫌を取る事」が、実益を兼ねた永遠の謎を秘めた趣味：Never Ending Hobby とします--？

他人から見れば無駄に思えても気楽な趣味が良いですネ。世の中、その様な趣味や自己満足が昇華して芸術や文化が生まれる側面もありますから！

※ 次回のリレーエッセイの執筆を中大技術士会幹事、加藤行勝さんをお願いします。

■ 「里山通信」： 木内 希沙彦さん（森林部門）

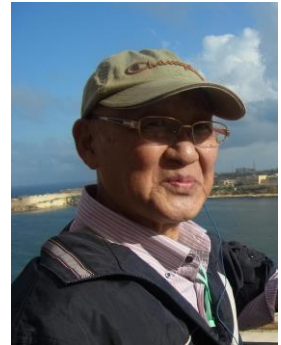
生まれ育った故郷の佐久に居を構えたのは、かれこれ四半世紀前のことである。その契機となったのは「私はこんな空中で生活するのではなく、地に足をつけて生きたい」という妻の一言であったが、その背景には中学3年生に進級を控えた長男の進学問題があったことは否めない。

バブル絶頂期の平成2年3月、私は大阪で開催された「花の万博」の事務局にあって、半年間にわたる世紀の大イベントの開幕を控えていた。すでに大阪暮らしが3年を過ぎ4年目の春を迎えようとしていたのであるが、同時に長男の進学問題に直面していたのである。

万博の閉幕は9月30日であり、それが終われば年内には東京に戻されるであろうことは明らかであり、長男の高校入試に向けての対応が喫緊の課題となっていた。

結局、ああでもない、こうでもないという幾多の紆余曲折を経て、私の生まれ故郷である佐久に戻ることにしたのである。最後の大阪の思い出に、プリンスホテルで家族そろって会食をすることにした。豪勢なフランス料理に戸惑いながら家族団らんの時を過ごしたのであるが、食事が終わると長男が「これからどこかの鉄道に飛び込むなんてことはないよね」などと真剣に聞いてきた。豪勢な食事をしたあと一家心中したというニュースが脳裏をよぎったのであろうが、そんな長男を不憫に思い目頭が熱くなった。思い返せば長男にとって5校目の転校でもあったのだから。

それから18年後、林野庁を退職し、すっかり地元で溶け込んでいる妻の元に戻り、7年ほど民間会社に勤めたあと平成27年の夏から悠々自適な里山暮らしを始めることになった。これを契機に「浅茅里山総合研究所」を看板に、里地里山のあらゆることについて、研究心を旺盛にしつつ伸び伸びと生きてやろうと決意したのである。



北陸新幹線佐久平駅より
蓼科山、ハケ岳を望む。
手前の高架はJR小海線。

戦国の世にあっては武田信玄に蹂躪され、江戸時代から明治維新に至るまでは、徳川忠長の領有地であったり天領であったりした小さな村での生活や出来事を折に触れ報告したいと思う。

私の居所

私の住んでいるところからは、信州人がこよなく愛する「信濃の国」に颯爽と登場する「浅間、蓼科、ハヶ岳」のほか「北アルプス連山」までもが遠望できる。早い話が佐久というところは四方八方山に囲まれた大盆地なのである。

その大盆地の真ん中を千曲川が南北に流れ、佐久盆地を東西に分断している。千曲川の右岸つまり東側は明治以降商工業が発展した。しかし、左岸側は稲作、養蚕、養鯉、木材生産等の農林水産業に従事していた。なぜこのような東西格差ができたのかという問いに対する村の古老の答えは、明治時代に千曲川の西側に鉄道を通すという話があった際、「鉄道の振動で田んぼの水がこぼれ落ちる恐れがあるから」という理由で反対運動が起こり、結局東側を通ることになったとのことだ。これによって西側は東側の後塵を拝することになったというのだが、古い話なので真偽のほどは知れず、村誌を紐解いてもその気配さえない。

私の居所は頭をたたいても、「文明開化の音」さえしなかった人々が住んだ西側区域の竹田地区にある。標高は 630m で、東京でいえば高尾山の頂上に住んでいるようなものである。家の東側には標高 700m の虚空蔵山が寄り添っていて、冬ともなればこれが邪魔をして 9 時頃まで朝日を拝めないことになる。とはいえこの虚空蔵山の頂上は佐久平を一望できることから、武田信玄の烽火台として重要な位置づけにあった。

この由緒ある山の麓に自宅を構えているが、子供らは既に巣立ち妻と二人暮らしである。そして、少しばかりの田畑で、夫婦で農作業に精を出している。敷地内にある別棟に「浅蓼庵」と名付けた庵を結び悦に入っている。ただし、冬はとても寒く利用できないため基本的には初夏から初秋までと、利用期間は限定されているのではあるが。

薪ストーブ

佐久地域は寒さが厳しい。その厳しい冬を乗り越えるためには家中を暖めなければならない。熱源を電気や灯油に求めざるを得ないが 24 時間暖房ともなれば大変なコストを覚悟しなければならない。そこで一晩中燃やしても大したコストではなかろうということで薪ストーブを設置することにした。アメリカ製の鋳物ストーブを調達したのだが、ストーブ本体より煙突のほうがずっと高いものだという事実を初めて知った。

燃料の薪は荒廃した畑にある桑の木や、周辺の里山から無償のものを調達した。一言で言えばそんなものであるが、しかし畑の桑の木はツルで雁字搦めにされていてチェーンソーで伐採・造材するにはずいぶん手間がかかるし、里山からの調達に至っては急な斜面を担ぎ上げなければならない。軽トラやチェーンソーの燃料代等を含め人件費もコスト換算すれば電気や石油のコストのほうがずっと安いのではないかと、などと思ってしまう。



4 年目を迎えるダッチウエスト社製の薪ストーブ。氷点下 10℃を超えてもほっこりとした暖かさを提供してくれる。

ストーブの炎は美しい。疲れた体をソファに横たえてじっと炎を見つめていると体の芯から癒される。これこそが電気や石油では味わえない薪ストーブの魅力である。もちろん火（熾き）を絶やさずにおけば、夜通し家中に温もりが残る。こうした生活環境を維持するためには、危険を冒しながら老体に鞭打って薪づくりに励まなければならない。それが薪ストーブと生活を共にする者の宿命なのだと自分自身に言い聞かせているが、いつまで続けることができるかそれが問題である。

ツバメ

最近ツバメの数が減ってきているとのことで、佐久市が住民の協力を得て「ツバメ営巣実態調査」みたいなことをやっていた。ツバメの数が減った背景には近年の家の構造にも原因がありそうだ。在来工法による建築物が減り、軒先の垂木や梁がむき出しになった家が少なくなったせいではないかと思っている。例えば昔はツバメを益鳥として遇し、軒先に営巣板まで作ってやったし、家の居間の天井に巣を作りフンで汚されても追い出すことはなかった。それが最近では壁が汚れるからという理由で、ツバメが巣を作り始めると即座に払い落とし、巣を作らせないようにする住人が増えた。

我が家には新築当時からツバメがやってきて巣を作り、子を育て、そして秋には南に帰って行った。家は軒先が巣を作るのに適さない構造だったため、アルミサッシの枠の上部に器用に土を盛り窮屈そうな巣が作られた。それ以降毎年のようにやってきては巣を修繕し子を育てた。巣立ちの朝はどこからかたくさんの仲間が集まって騒ぎ立てた。

こんな風景はとても微笑ましいのだが、時として思ってもみない事故が発生したりする。ツバメは習性として巣から直接に水平もしくは上部に舞い上がることはなく、いったん下降して上昇する。この習性を観察し虎視たんたと親ツバメを狙うものがいた。我が家の飼い猫である。ツバメの最下降点付近に待機し様子を伺っていたが、ツバメが下降するやジャンプして両前足でツバメをキャッチしてしまった。佐々木小次郎の秘剣ツバメ返しばりの妙技に見とれていたが、走り寄って飼い猫からツバメを奪い取り介抱してみたが後の祭りであった。ヒナはどうなるか心が痛んだが、驚いたのは残された親ツバメ（死んだのが母親なのか父親なのかはわからない）をほかのツバメたちが助け、ヒナを立派な成鳥に育て上げたのだった。巣立ちの朝は殊更ににぎやかだった。



アルミサッシの狭い縁に器用に巣を作り子育て中。

営巣中のツバメの天敵はアオダイショウである。そしてそのアオダイショウの天敵がカラスなのだ。この生態系の妙が見事に発揮された瞬間があった。ある日の朝、居間の外で大き

な音とともにツバメの騒ぎ立てる声が大きく響いた。外に出てみると軒下にツバメの巣だけが不気味に転がっていて、ヒナたちの姿はなかった。棒を突き立ててもびくともしない頑強なツバメの巣が、そっくり突き落とされたのであるから相当な外力が加わったのだろう。カラスがツバメのヒナを狙ったのであれば、その行為は日常茶飯事となるのだろうが、そういうことは一切なかった。考えられるのはアオダイショウがヒナを狙って巣に近寄りヒナを襲い始めたそのタイミングでカラスがアオダイショウに襲いかかり、その衝撃力で巣が蹴落とされたのではないかと推測される。なお、ほかのヒナたちの姿はなかったので親鳥が安全な場所に誘導したのかもしれないが、その安否は知れなかった。

蜘蛛の巣に引っかかったツバメ

ある朝、蜘蛛の巣に何やら変なものが引っかかっているのを発見した妻が外に出て見たものは、蜘蛛の巣に引っかかりだらしく翼をばたつかせているツバメの姿だった。妻はあわてて蜘蛛の巣からツバメを救出し、全身にからみついた蜘蛛の糸を一つ一つ解きほぐしてやったとのことだ。その間神妙にしていたツバメは、翼が自由になると知るや飛び立っていったという。

驚いたのは妻ばかりでなく、蜘蛛もビックリしたであろう。「とんでもないのが引っかかってしまったぜ。下手に近づくとこちらのほうがやられてしまうぜ」などと思ったかどうかは知らないが、それ以来蜘蛛はツバメの通り道を避け、ほかに新居を構えたようだ。

アオサギ

佐久の里地にはアオサギが飛び交う。この鳥の鳴き声はとてつもない悪声である。朝に昼に夕に鯉やフナを狙ってじっと立っている姿や飛び立つ姿は、少しは絵になるが、いったん鳴きはじめると幻滅の域にある。夜の夜中に「ギャー、ギャー」と鳴きつつ夜間飛行されたらたまったものではない。しかし鯉やフナを養殖している者にとっては害鳥であっても、ほかに悪さをするわけではないので駆除云々という次第にはならない。

アオサギが夜間飛行をしている状況を見ると、彼らはいわゆる「鳥目」ではないのではないかと思ったりする。そうであれば彼らを餌付・調教して農作物を食い荒らす野生動物の追い出しに役立てられないか、などと妄想したりもする。

ソバ

健康志向もあり最近のソバ人気は衰えることがない。その人気に乗じているわけではないが、平成 27 年以来小さな作付面積ながらソバ栽培をしている。初年度は蒔き時を誤り収量は蒔いた種より少なかった。2 年目は何とか約 8 kg のそば粉を生産することができた。そして 3 年目となる昨年にはさらなる高みを目指し約 5 畝ほどの面積に作付けしてみた。

耕作地は山の斜面にあり鹿の害が甚だしいため、周囲を防護ネットで囲ったうえで、さらに上部には鳥追いのキラキラテープを張り巡らせた。こうした努力が実を結び、鹿による害はなく鳥害も最小限に抑えつつ収穫期を迎えることになった。

しかしながら、想定外の二つの理由により収穫はほとんどできなくなってしまった。一つは 59 日間に及ぶ長期入院を余儀なくされたことであり、もう一つは長雨と晩秋に襲来した台風によってである。つまり長期入院が収穫適期から始まったこと、秋雨が収穫を拒み、台風

の襲来はとどめを刺すが如きに、熟したそばの実を徹底的に地面に叩きつけてしまったのである。これらが私のそば栽培 3 年目を棒に振らせてしまった要因である。



そもそもソバ栽培を始めたのは、自分が育てたソバを自分で打って食べたいという思いからである。「自分が育て、打ったソバはどんな名店のソバよりも旨い。たとえその形状が饅頭だとかキシメンだとか酷評されても」という先輩の言を金言に、過去の失敗にもめげず四年目の挑戦に向かって準備をしていきたいと考えている。

村祭り

村々には村社と呼ばれる神社がある。私の村の村社は 16 世紀半ば頃近隣地に設けられていたものを、江戸時代末期に現在地に移転されたのだという。

昭和 30 年代、こんな小さな村のお祭りの日にも、寅さんみたいな香具師が 2~3 やってきて店を出していたし、子供ながらに、50 円ほどの小遣いで買った玩具に都会のにおいを感じたものである。家には親戚が大勢やってきて、日常の忙しさから解き放たれたひと時の安息に浸っていた。夜には太鼓の音にひかれるように神社での夜祭を楽しんだりもした。しかし現在に至ってはそんなハレの日の思い出のひとかけらさえ残っていない。

そんな村社の氏子総代としての役回りで、現在村社の運営を担っているのだが、幟を立てたり、収納したりする者も少なくなってしまった。村祭りは我が国の高度経済成長以降もはや村人のハレの日ではなくなってしまったのである。

神官を含め十数名で祭礼を済ませると直ちに撤去作業に入り、その後神社は何事もなかったように、日常の静寂に包みこまれることになるのであるが、虚しさが募るばかりである。

■ 技術士第一次試験合格体験記： 片桐 拓重さん（理工学部人間総合理工学科）

所属する研究室の担当教授に、都市計画やまちづくりの分野で将来働いていくためには、技術士の資格を持っていたほうが良いと勧められ、大学3年時に技術士第一次試験環境部門の受験を決めました。半年後には就職活動が始まることもあり、なにか資格を得たいと思いました。



私は大学3学年のときに受験したので、講義や課題と試験勉強を両立させることが大変でした。そのため、試験勉強は試験の2週間前から短期集中で行いました。専門科目はテキストと過去問を活用することで、効率よく、必要な範囲を絞って勉強することができました。基礎科目は、高校の数学や物理の計算問題に似ているものもあったので、私には比較的解きやすい問題でした。適性科目は、常識的な問題や倫理観を問われる問題が多く、コツをつかむまで少し時間がかかりました。しかし、こちらも、短期的に集中して解いたことで、合格につながったと思います。

学科の友人と自習室にこもって集中して勉強したことも、ポイントであったと思います。友人と一緒に受験して、自分だけ不合格であったらとても悔しいと思い、一生懸命勉強しました。環境部門の第一次試験は暗記するものが多かったため、自分は短期集中で臨みました。技術士の第一次試験の合格率は全体では50%程度となっており、合格率が高い資格試験とは言えません。私は短期間集中型で乗り越えることができましたが、暗記が苦手な人や、繰り返し問題を解くことによって自信をつけたい人は、早めにコツコツと勉強することをお勧めします。難しい問題ではないので対策さえしっかりすれば確実に合格することができます。

技術士第一次試験に合格した今、自分の力が認められたことがとても嬉しく、自信をもつことができました。これからは、技術士第一次試験合格を生かして、環境分野で活躍していきたいと思っています。